

## 幼児前期における言語発達

国 家 順 子

### I 目 的

十年一昔とよく云われるが、最近の一年は、昔の十年にも匹敵するかわかれるほど、時の持つ重みは変化して来ているようである。我々が誕生以来、当然のこととして受け容れ、習得し続けて来た人間の言葉は、近年特にめまぐるしく揺れているが、こうした複雑な言語的環境は、幼児の成長、発達とどの様にかかわり合っているであろうか？ 今日、子供の成長は、身体的には、成長加速現象によって、目を見張るばかりのものがあるが、それは幼児についても当てはまっているようである。そういった現象が、果して精神的な面でもみられるであろうか？ 現代の子供の言葉の発達は、昔の子供に比べて、急激な変化に曝されているその社会生活と歩みを共にすべく、生れ落ちた当初から著しい進歩をみせるのであろうか、それとも、その内面的な成長を待つて初めて著しい進歩をみせるものであろうか？ 亦、それは年令の増加につれて累加的に発達するのか、それとも、或る時には飛躍的に、或る時には停滞しながら発達していくのであろうか？ 言語発達の始まる時期、順序に関して、昔と今との差というようなものがあるものであろうか？

人間は生れながらにして社会的な動物であり、彼は内面的な感情、意志や思考と外面的な環境との相互作用による言葉を使用するのであるが、それは他の

人間との社会的交渉の中で獲得されるので、彼が言語的によく発達していることは、彼がよりよく社会的に発達していることを示すのである。これを逆の見地からすると、彼の言葉を捕えることによって、幼児の置かれている環境、生活のすべてを理解することが出来るとさえ云えるであろう。実に、フムボルトによれば、「言語は全人格の表現である。<sup>(1)</sup>」

なるほど、言葉は或る精神作用の外化であり、観察の一つの確実な手がかりではあるが、本来の性質上、複雑且つ深遠なもので、当然言葉そのものだけを切り離して考えることは無意味でさえある。言葉は、代々受け継がれて来た社会制度なのであるから、歴史的な流れの中で、それをみとめることが本来の姿であろう。

そういった前提の下に、ここで一幼児の誕生から満4才までの言葉の記録を分析、整理し、従来の同様な研究結果と比較検討してみたい。<sup>(2)</sup>

## II 方 法

対象……著者の子供N（S，36，12，26日生 女児）

A，日々の観察による記録

社会一般で通用する形は未だ整えていないが、Nの発する音声に、一定の形と反復とを認め、それが、単に偶然に遊びの結果得られたのではなく、確かにそこにNの意図が含まれているのだ、ということに、著者が第六感的に気付いた彼女の生後7ヵ月11日目から毎日、新しく気付いた音声を記録していった。

（村田孝次氏によると、これは母親による「誤認された初語」であるそうであるが<sup>(3)</sup>）

その一定の音声に、客観的にも意味を持っていると認められたのは、記録に留め始めてから67日目の「バイバイ」であり、かくしてNの音声は、言語と呼ば

るにふさわしいものとなった。

### B, 久保氏の方法による記録

言語数の増加と、深まりゆく複雑性のために、やがて毎日の記録は困難となり、これに代る方法として、大正12年、久保良英氏が「児童研究所紀要」に発表されたように、2才時の言葉の観察に当っては、Nの誕生日を中心に前後3週間、午後9時～10時までの一時間に、Nの使用する言葉の総てを記録した。以後、この間になされる言語的発達は大きいと考えられるので、成長の波がよく解かるようにと、6カ月毎に同様の方法を実施した。

## Ⅲ 結果及び考察

久保氏の方法に従って、得られた結果を整理してみると、母音発現の順序は次のようである。

Table 1 母音発現の順序

観 察 者	被 観 察 者	順 序				
久 保	久保氏 長男	ウ	ア	エ	イ	オ
〃	〃 次男	ウ	ア	オ	イ	エ
〃	〃 三男	ア	ウ	エ	オ	イ
国 家	N	ア	ウ	イ	エ	オ

K氏<sup>(4)</sup>ご令息とNとの比較からは、ア、ウの音が一般に早く表われ、イ、エ、オの発現には非常に個人差のあることが解る。

子音の発現については Tab 2 にある。

K氏ご令息達は、一般に二才を過ぎるまで、ラ行を発音しないか、発音するとすればヤ行に転化したこと、サ行をタ行に転化したということが示されているが、Nの場合ラ行は満3才になっても十分な発音が出来ず、ダ行やヤ行に転化している。しかし、リに限って2才11日目にそれに近い発音が出来よう

Table 2 子音発音の順序

観察者	被 観 察 者	順 序
久 保	久保氏長男	ク シ ハ ワ バ ブ バ ヤ チ ャ マ ブ ボ カ
〃	〃 次男	ガ ク プ グ ル ギ バ バ デ ュ タ チ ャ デ ダ ナ
〃	〃 三男	シ ワ フ パ バ タ チ チ ャ ギ ャ ガ カ マ ム ニ ャ ク ワ
国 家	N	ク フ ハ バ パ ユ シ ャ マ シ ャ ナ ブ タ ヤ チ ャ プ

になった。

又、氏によれば、sやshの音も3才以後になっても発音されず、タ行に転化されたということであるが、Nの場合には早く発音された。Nを現代の幼児の典型的なものと考えることが許されるならば、このことから日本語の外国語化ということが推論されるのだが、彼女の親しい遊び仲間（S、36、12、28日生 女児）も常にこの音をタ行に転化していたので一概に断ずることは出来ない。しかし、外国ではこの音はかなり早く発音されるとかである。この音が我が国の子供に発音出来ないのではなく、喃語期には発音されていたであろうが我が国の言語体系の立場から、選択外の範囲に押しやられたのであろう。

Nが言葉を模倣しようとする徴候（内的刺激）は、満1才の誕生日にみられた。他方において、幼児の言語が意味を獲得するのは、外的刺激である社会的環境に支えられるところが大きいので、Nの家族構成に触れると、祖父、祖母父、母と彼女の5人で大人に囲まれた生活であったと云える。一般に、幼児にとって最も接触の多いのは母親の筈だが、彼女の場合、生後1年3カ月目まで母親が教職にあつたので、その間彼女と最も接触の多かったのは祖母で、このことは彼女の語彙の巾に大きく影響していると思われる。たとえば、今では殆ど聞かれないような童うたを教わったり、ことわざを教わったりすることも多かったのだ。他面では、例えば、うろおぼえの誤った現代の童謡を教えられた時には、Nにとって少なからぬ混乱をきたしたかもしれないが……。

有意味語の出現（Tab, 3）が、比較的早く順調であったNは1才の誕生日れ

Table 3 有意味語の出現

観察者	被 観 察 者	出現の日	語	意 味
久 保	久保氏長男	229日目	アアン	乳その他をねだる時
		257	アーイ・アイ	呼びかける時
		340	ブーブー	自動車
		354	バッパ	祖母
"	" 次男	243	アッ・アッアッ	呼びかける時
		257	アッウン	返事
		345	ウン	"
"	" 三男	318	アー	呼びかける時
		324	ウーン	馬
		340	ガー	電車
			アー	自動車
国 家	N	346	アーアー	何でも催促する時
		227	アッハ	注意をひこうとする時
		294	アディディディディー	嫌な時
		311	ンマンマンマー	食事をしながら

以後着実に語を身につけ始めた。

生後1年6ヶ月11日目(560日目)には単語の並列も始まって、有意味語開始以来11カ月間の、単語期→文章期への発達を遂げた。K氏長男は生後528日、三男は586日目に、このことを遂げている。

新語獲得表(Fig. 1)によっても解る通り、1年7カ月頃からの彼女の語彙の増加には著しいものがあり、質の面でも、名詞+動詞、動詞+助動詞、名詞+形容詞と単語が結びつけられるに至っており、言葉の増加は以後4カ月に亘ってピークを示している。

今、言語開始以後2才までの、Nの言葉の数字の上に表われた結果だけを、K氏長男、三男の場合と比較すると、総数ではK氏長男の約4倍、三男の3.2倍に達している。K氏は名詞の内容をTab. 5の12項目に分けて、「両児共に健康に関する語彙最も少なく、之に次いで少ないのは植物の名であり、これに反し、動物の名はかなりの多く知られている」と述べられている。

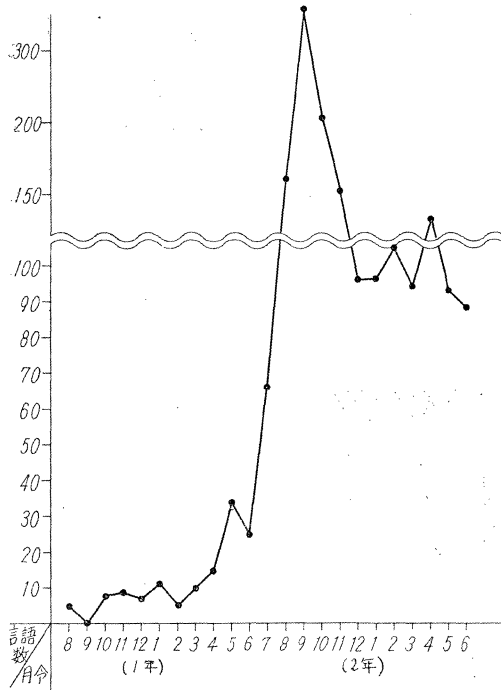


Figure 1 新語獲得表

Table 4 生後2カ年の言語数

	総計	名詞	動詞	助動詞	形容詞	副詞	代名詞	助詞	感動詞	形動	容詞	連体詞	接統詞
K氏長男	200	133	30		12	9	5	2	9				
〃 三男	254	162	36		20	17	7	1	11				
N	814	446	141	10	40	73	11	34	40	14	4	1	

Nについては、言葉を身につけていく過程や、幼児の思考を探りたいと考え、直接的環境（実際に見たり触ったり食べたりして知る）によって得たもの、間接的環境（TV、絵本でみたり、歌、物語で聞いたりして観念的に知る）によるもの、夫々8項目づつに分けてみた。

Table 5 名詞の内容

観察者	項				目			
久保	身体	健康	衣服・身装	食物・食事	動作	家具・家屋・玩具		
	天然	動物	植物	人	文化	雑		
国家	直接的環境				間接的環境			
	人	衣	食	住	〃	〃	〃	〃
	動物	自然	文化	その他	〃	〃	〃	〃

その結果は Tab. 6 の如くである。

Table 6 満2才までの名詞の傾向

	直接的環境によるもの	間接的環境によるもの	計
人	62	15	77
衣	32	1	33
食	81	2	83
住	87	3	90
動物	18	12	30
自然	18	7	25
文化	32	30	62
その他	35	11	46
計	365	81	446

直接的環境によるものがいずれの場合にも圧倒的に多いことから、自分の身近かに、実際に在るものの名から身につけ始めることが解る。

Nの場合、住居（家具、玩具 etc）に関するものが最も多く、次いで食事、食物に関するもの、第三位に人（对人的なもの、身体的なもの、生理的なもの）に関するものを獲得しており、自然に関しては最少で、このことはK氏の観察からも云われており、興味の一般発達法則に当てはまっている。

更に、K氏にならって、満2才の誕生日の記録から、第一週目の総ての語彙

について、品詞別に使用回数をみると Tab. 7 のような結果になる。

Table 7 品詞別使用頻度

	名 詞	代名詞	動 詞	形容詞	助動詞	副 詞	接続詞	助 詞	感動詞	連体詞	形 容 詞	計
第1日	179	33	181	28	63	30	0	146	36	5	5	706
2	184	80	208	38	98	74	0	269	59	0	8	1018
3	175	56	239	56	67	43	0	311	46	2	5	1000
4	174	69	339	23	123	60	0	403	56	4	2	1253
5	217	70	305	35	91	56	0	307	52	1	2	1136
6	115	24	184	34	63	20	0	190	66	0	6	702
7	139	63	256	21	107	39	0	248	52	0	34	959
平均	169	56.42	244.57	33.57	87.42	46	0	267.71	52.42	2	8.85	967.7

形容動詞、連体詞、接続詞を除くと、助詞が最も多く使用されており、次に動詞、名詞、助動詞で、氏の結果と最も異なる点は、動詞が名詞より多く使用されていることである。語彙の種類が少ない代名詞が、形容詞より多く使用され、感動詞、副詞と同じ位使われていることも解る。接続詞は、この最初の一週間では未だ全く使われていない。ついで乍ら、氏の項目には含まれていない連体詞も、他の品詞で代用され得るし、外国語の第三人称的なものも含んでい

Table 8 記録の二つの方法の結果の比較

	日々の記録	誕生日前後三週間の記録
名 詞	446	458
動 詞	148	189
助 詞	34	36
連 体 詞	4	4
代 名 詞	11	18
形容動詞	16	10
接 続 詞	1	2
副 詞	74	107
形 容 詞	40	41
感 動 詞	40	61
助 動 詞	10	15



るので、日本語の中ではむづかしいものに属するようである。

K氏は、2才以後は毎日記録するよりも、氏の採られた方法の方が却って正確であることを発見されているが、Nについても、満2才時に二つの方法の結果を比べると、Tab. 8 のようになり、誕生日前後三週間の記録には、以後10日間に新しく使用された語も入っていることを考えると、氏の云われることが妥当であることが解る。

今、Nの2～4才までの記録から、その間の成長をみると、先づ名詞については次のようである。

Table 9 2～4才の名詞の傾向

	直接的環境					間接的環境				
	2才	2.5	3	3.5	4	2	3.5	3	3.5	4
人	56	67	83	107	91	26	20	19	27	38
衣	28	37	36	39	26	3	3	2	5	1
食	89	68	67	79	66	2	1	1	0	2
住	71	79	88	98	109	10	7	3	2	5
動物	9	15	29	24	23	20	21	19	19	10
自然	15	26	39	52	53	20	6	3	6	5
文化	38	56	75	132	150	30	33	35	56	102
その他	31	39	39	61	55	10	8	2	3	5
計	337	387	456	589	573	121	99	84	118	168

直接的環境によるものでは、2才時には食事に最も関心が深かったのが、2才6カ月時以後、住、文化（施設、地名、歌、遊び、貨幣 etc）やその他（色数、初め終り等の抽象名詞）に関心が深くなっている。つまり、Nの関心が、自己を中心とした世界から外界へと拡って行きつつあることが示されており、間接的環境によるものが次第に真の理解の中に導き入れられていることが解る。人間は、常に新奇なことに興味を持ち、それを実際に自分のものにしようという欲求を持つものである。彼女も、間接的にしか知らなかった語を直接的に知り得

ようになり、次々と未知の語を既知の語に変えて行くのだと思われる。間接的環境による語彙のうちの文化の項が年令を追って増し、4才において最高であることからこのことが推測されるだろう。かくて、名詞の総数は、2才時には458、2.5才時—486、3才—540、3.5才—707、4才—741と、それなりの増加をたどっているが、K氏令息との比較から、4才時における伸びの少ないことが明白である。

名詞以外の語については Tab. 10 のようである。

Table 10 2～4才の名詞以外の品詞の傾向

	代名詞	動詞	形容詞	助動詞	副詞	接続詞	助詞	感嘆詞	形容詞	連体詞	計
2才	18	186	40	15	107	2	36	58	9	4	475
2.5	13	203	45	16	80	6	43	67	13	9	485
3	14	210	49	18	101	6	54	51	12	7	523
3.5	19	254	54	19	101	8	60	56	20	10	601
4	16	215	55	19	97	10	61	71	19	10	573

cf. K氏による生後4カ年の言語数

	代名詞	動詞	形容詞	助動詞	副詞	接続詞	助詞	感嘆詞	名詞	計
2才	7	51	20	11	24	2	3	12	165	300
3	19	179	50	33	64	5	44	31	461	886
3.5	20	221	62	41	92	8	54	32	701	1213
4	23	301	86	47	129	10	66	32	981	1675

2才時は厳寒期に当り、戸外で遊ぶことは少なく、比較的静的で自己中心的な場面での観察が多く、状況にもあまり変化がなかったが、2才6カ月時は、動作が非常に活発だったし、友達と一緒にいる場面での観察も多かったが、そんな時には、動作をする時間や相手の話を聞く時間が多くて、発語数は非常に少ないというように日によって大きな変化があった。3才になると、全く訳のわからぬ語は少なくなり記録も容易になったが、そろそろ記録されていること

を意識し始めていた。仮定の「～したらは?」「～やったらは?」という云い方、「この位」「絶対」等の言葉をよく使うようになっていた。3才6カ月時には、周囲の人々の目からみて急にしっかりして来たと言われるようになり、お金に興味を持ち、身長、体重を計るのをとても喜んだ。家の中に少しもじっとしていないので記録の苦労は倍になったが、友達と一緒にいるとあまり発語しなかったのは2才6カ月時と同様であった。が、とにかく友達と遊びたくて仕方がないようであった。未だ起きたばかりで、友達が朝ご飯も食べていないうちから誘いに行ったりした。4才時には、文字にも興味が深くなり、濁点、半濁点のないものならひら仮名は一応読めるし、自分の名は筆順を無視してではあるが書けるようにもなっていた。絵による表現も、それらしい形で表わすようになっていた。体力もつき、でんぐり返り等も出来、寒くても外へ走って出たり、続けさまに話したりで、記録に際しては手こづらされた。

数的な変化について、K氏令息とNとの比較をすると、K氏の結果では幼児の語彙は年を追うて、名詞、動詞、形容詞、副詞、助詞、等順調に、累加的に増加発達しているが、Nの場合の発達は時に不規則で、動詞ではむしろ、4才時には結果的に減少さえしている。副詞、形容詞においても僅かに年令に伴なう増加を示して、やっとその面目を保っている。名詞は種々の概念の骨組となり、これに伴なう修飾語として他の品詞が考えられるのであるが、Nの場合、名詞は順調に増加しているのに、他の品詞がそれに伴って増加していないのは不思議である。けれども、そんな差異の中で、唯接続詞だけは、「全く同じ」と云える程よく似た発達を示している。このことから、人間の言葉の内面にある思考というものは、何時の時代にあっても本質的に不変であると云えるかもしれない。全体としてみると、K氏令息の場合よりもNにおいては、言語発達の初期の段階で著しい発達を示し、後の年令においては緩慢な発達を示している。K氏令息には、3.5才に到ってほぼNと歩調を合わせ、続く年令段階では

Nの結果との著しく大きな発達上の相異を示している。

K氏令息では、名詞を初め総ての品詞の発達の仕方は段階的で、着実にその数を増しているし、2才時に発せられた語は殆んど総て、3才時、3.5才時、4才時にも使用されているのにNの場合では、名詞、助動詞、代名詞、接続詞、連体詞、助詞は、K氏令息と同様段階的、累加的な発達を示しているが、形容詞、感動詞、副詞、動詞、名詞等は、2才時に発せられても2.5才時にはもはや使われなかったり、3才時に発せられたものが3.5才時には使われないということが多くみられた。(一定の期間にその言葉が使用されなかったということと、その言葉が忘れられたということが同義であるとは云えず、ここに複雑な問題があると思う。)このことは、世の中の動きが激しくなり、次々と新しい言葉が造り出されていることの反映であるかもしれないし、50年前に幼児を取り巻いていた環境は、今よりも静的で変化の乏しいものであったかもしれない。或は、たまたまNの観察時が、冬と夏という正反対の環境下であったので目に触れる風物にも差があったことの結果かもしれない。K氏の場合、セミ、トンボ、柿等が2～4才までの総ての観察時に、ハツタケ、氷が3～4才の各観察時に使用されているのをみると、絵本場面で、毎回出来るだけ同じ様な場面で観察されたのかと思われる。Nの場合は、何の考慮もなく、彼女の遊びたい場所で遊びたい相手と、好きな玩具で遊んでいる時に記録したので、方法上に違いがあったのかもしれない。Nの、特に間接的環境による名詞において廃用がみられるのは、2才時には間接的にしか知っていなかったものを、2.5才時には直接的に知り得る段階に達していることが多く、その分だけ直接的環境によるものの中に組み入れられているからである。Nの場合、各品詞の飛躍的に発達した年令をチェックすると、名詞3.5、動詞3.5、助動詞3、形容詞、3.5、副詞2、代名詞3.5、助詞3、感動詞4、形容動詞3.5、連体詞2.5、接続詞2.5才で概してその発達の peak は、4才においてよりも3.5才においてみられる。

K氏の場合はどうかと云えば、名詞4、動詞4、助動詞3.5、形容詞4、副詞4、代名詞4、助詞4、感動詞3才で、明らかにその peak は4才においてみられる。更に、Nの各品詞の発達の様相が、どの年令段階で似ているかをみると Tab. 11のようで、大体2～2.5才までの発達の傾向が似ており、又、3～4才の

Table 11 似た言語発達の様相を示す年令

品 詞	内 容	年 令						
助 動 詞		2	2.5	—	3	3.5	4	
代 名 詞		2	3.5	—	2.5	3	4	
接 続 詞		2	—	2.5	—	3	—	3.5 4
連 体 詞		2	—	2.5	3	3.5	4	
形 容 詞		2	2.5	—	3	3.5	—	4
感 動 詞		2	—	2.5	—	3	3.5	— 4
副 詞		2	—	2.5	3	—	3.5	— 4
助 詞		2	—	2.5	—	3	3.5	4
動 詞		2	2.5	—	3	3.5	4	
名 詞	人	2	2.5	—	3	3.5	4	
	衣	2	3	3.5	4	—	2.5	
	食	2	2.5	3	3.5	4		
	住	2	2.5	3	—	3.5	4	
	動 物	2	2.5	—	3	3.5	4	
	自 然	2	2.5	—	3	3.5	4	
	文 化	2	2.5	—	3	—	3.5	4
	その他	2	2.5	—	3	—	3.5	4

(—は似ていないことを示す。)

発達傾向が似ていて、幼児前期と一口に云っても、そこに異なった発達傾向の群があることが解る。ゲゼルも、「3才児の成熟の水準は2才児の成熟の水準に比べると、これこそ真の変化であるということが出来る。言語の面では、3才児は2才児よりも4才児の方によく似ていると云える。」と云っている。<sup>(5)</sup>

使用された言葉の数の多いものに、一層多くその子供の興味があり、一層その子供の生活と結びついていると考えて、名詞の内容だけに限って比較してみ

ると、K氏令息では、2才時には主として動物、飲食物、社会的事項に関心があり、3才では飲食物、動物、社会的事項、3.5才…飲食物、日用品並家具、社会的事項、4才…飲食物、社会的事項、日用品並家具に夫々関心があるとみられる。Nはと云えば、2才時には食物、人、住に関するもの、彼女の実際の日常生活で密接な掛わりを持つものに関心があり、それ以後4才まで、いずれの時期にも一貫して、文化、人、住に関するものに限られているのは面白い現象で、K氏令息の場合とほぼ似たものに興味、関心のあることが伺い知れる。特に3才以後、両児共に社会的事項（Nの場合は文化の項）に関する語彙が著しく発達しているのは興味あることで、幼児の関心が、直接身边にあるものから、間接的、抽象的なものへと拡大されていきつつあることが解る。この様にして、子供の思考は一層観念的、抽象的なものへと発展し、やがて人間文化を受け継ぐに足る力を培養しつつあるものと思われる。

が、全体としてみられるK氏令息とNとの発達の様相の相異は何から来ているのであろう？ 個人差ということが勿論考えられなければならないし、全体としての性差も考慮されなければならないだろう。身体的発達と同様、成長加速現象に負うところがあるのかもしれない。何としても、4才でNの言語発達が停滞している原因は何によるのか疑問である。

満4才時の記録の際に、一日（12月28日）は風邪のために、食事もベットでし、昼過ぎまで眠っていたので記録が出来なかったこと、満3才6カ月頃には文字に興味を持ち始めていたが、このことは歩行と言語の習得の時期とが一般にづれるように、文字そのものへの興味と言語を習得する興味とも相容れないのではなからうか。又この頃から、一応日常生活に必要な語は自由に使用出来るようになっていて、そろそろその応用といおうか冒険といおうか、自分で考案した変な新造語を喋ったりし始めていたこと、例えば七面鳥、八面鳥などと云ったり……。更に、今までは自分で確認するために、いわば自分のために

言葉を反復することが多かったが、4才時には、その面白さに人が笑うのでもっと笑わせようと、いわば他人のために言葉を反復することがみられた。このことについては、ゲゼルも、4才児はおしゃべりで、「ときによると彼は、人との社会的調和を保つために、或は人の注意をひくために喋りまくっていることがある。又、わざとこっけいな云い方をして、言葉で遊ぶこともよくやる。とくに誰かそばに居る時には好んでそうする傾向がある。彼は、ひどい言葉の使いまちがい<sup>(6)</sup>をやって面白がり、わざとふざけてそうすることもある。」という風に述べている。

又、4才時には、自分の発した言葉が一々母親に記録されていることを意識していて、「コレ ママ Nチャンが云ウタコト 皆書イテンノ? ドーシテ?」とか「ママ Nチャン 今ナニヌネノ云ウタカラ ナニヌネノ云ウテ書イトイテ」とか云うことがあり、この年令以後の幼児の言葉の記録その他の観察方法に、何か改善がなされねばならぬと痛感させられることもあった。(今後は、もっと科学的な設備、記録装置などを利用することが考えられるだろう。勿論、幼児がその場面を不自然に感じないように十分馴れ親しんでからでなければならないと思うが。) 体力がついて来ていて動作が活発で、幼児は、身体で行動することを言葉で表現しながら動作すると云われているので、動詞等もっと多い筈なのに正月という特殊な時期にかかって、周囲がのんびりとあまり活気のない環境であったのに影響されたこともあって、正月の父親の休みの四日間のNの発語数は、普通の日の発語数の $\frac{1}{2}$ 以下であった。父親の膝の上で、TVの興味ある子供番組に見入っていることが多かったからである。尚、一月余り以前に、一番好きだったおじいちゃんが逝くなり、彼女にとっては大きなショックだったようで、それまでは友達の家も自分の家も区別なく遊んでいたのに、それ以後、自分から友達の家に出かけて行くことを嫌がり、淋しがる癖がつき、TVをみたり、一人遊びをするのを好むようになったということもあ

だったので、何らかの面で、彼女の精神生活に大きな変化がもたらされていたかもしれない。

しかし、

こうして、人間の思考は二重三重に外界または物質の世界とつながったものだ、ということがわかる。

第一に、思考は人間の神経または脳のはたらきだ、という点で、物質とつながっている。

第二にそれは行動と同じ性質をもつ、という点で、人間の「外の現象」とつながっている。思考はこの立場からは、行動が「内化」したものとみなすことができる。(中略)

第三に、「思考」は、「相手」を通して外界とつながっている。(中略)

第四に、個人の思考は歴史的社会的なつながりで、他人の思考と連続している。(中略)

こうみて来ると、思考という現象が、わたし一人にしか体験できぬものであるにもかかわらず、じっさいには、いろいろなつながりを通して、外の世界と連続をなしており、ことに物質的な現象とつながっていて、それなしには成立しておらず、またそれなしには説明も不可能なものであることがわかる。<sup>(7)</sup>

思考はおとなにおいては内在されている。それは言葉さえ伴わぬことがある。しかし、思考のはじめは行動だったのであり、それがだんだんと目にみえぬ形になって、おとなにおける内的思考に発展したのである。この意味では思考と行動とは連絡している。しかし、思考が行動の変形の結果であるということは、思考と行動とが、いまのままでまったく同一であるということを意味するのではない。思考と行動とは異なる。

こういう風に思考と行動は同一性と差異性とを二つながらもっている<sup>(8)</sup>ので、この二つを段階において、認識の発展を發生的にながめることが可能になる。

にみられるように、元来、思考は個人の外にあったものが、次第に内面化したものであるとすれば、Nにおいても3.5才を外面的思考の peak として、以後次第に言語が内面化の過程に入りつつあると考えられる。



## IV 結 論

目下のところ、唯一つの事例についてのデータしかなく、推論的なことしか云えないのであるが、K氏令息の結果を当時の、Nのそれを現代の幼児の典型的なものと仮定して考えると、当時よりも早い時期に言語発達の peak があることから、幼児の言語発達の時期が早まっていると云える。しかし、Piaget が

In thinking, the child is ignorant of logical justification, he juxtaposes propositions instead of connecting them, <sup>(9)</sup> ~

と云い、思考発達の一指針であるとしている接続詞が、50年という時代の間隔にもかかわらず、同様な発達を示していること、名詞の内容の発達が非常によく似ているということから、本質的には、子供の言語の発達は、当時も現代もあまり変わっていないと云える。これは丁度、昨今身体の成長加速現象について、身長、体重の著しい増加が云われている一方、運動能力やそれに伴う精神力が並行して発達していないと云われているのと同じ様に、TVの普及、物質文化の氾濫等による外的刺激の影響を受けやすい語の増加はあるが、主として身体的精神的遺伝の影響による内的成長を待って使用されるべき語には大した変化がみられないということが出来るようである。

ともあれ、一層多くのこの種のデータが得られることを願わずにはいられない。

## (註)

- (1) 矢田部達郎「言葉と心」培風館 昭19
- (2) 久保 良英「児童研究所紀要」第5巻 幼児の言語の発達 大正12
- (3) 村田 孝次「幼児の言語発達」培風館 昭43 pp. 132~133
- (4) 以下久保良英氏のことを略称する
- (5) A. ゲゼル著 山下俊郎訳「乳幼児の心理学」大日本図書株式会社 昭27 p. 86

- (6) 全 上 p. 97
- (7) 波多野完治, 滝沢武久著 「子どものものの考え方」 岩波新書 1963. pp. 22~23
- (8) 全 上 p. 51
- (9) Jean Piaget: *Jugdment and Reasoning in the Child*, London Routledge & Kegan Paul Ltd Broadway House: 68-77 Carter Lane, E. C. 4, 1951 p. 4

### 参 考 文 献

- Gesell and Thompson: *Infant Behavior*, McGraw-Hill Book Company, Inc. 1934
- Jean Piaget: *The Language and Thought of the Child*, Routledge & Kegan Paul Ltd, New York: The Humanities Press Inc. 1959
- M. M. Lewis: *Language, Thought and Personality in infancy and childhood*. George G. Harrap & Co. Ltd, 1963
- Mildred C. Templin: *Certain Language Skills in Children*, The University of Minnesota Press, Minneapolis, 1957